

無と愛の哲学

序

本稿の目的は、現代哲学の枯渇、閉塞状況を打開し、新たな哲学の地平を切り開くことにある。それには無を第一の原理とする。無とは人間存在の深淵、矛盾、闇、悲惨である。文明の発展と消滅。社会・文化・国家の繁栄と衰退。社会の豊かさと貧困。幸福な家族と離散した家族。高慢、墮落、腐敗。これらの根底には無が巣くっており、この無の考察なくしては、我々は人間存在の本質に到達することはできない。しかも、この無は茫漠たる宇宙、無限大の空間も意味し、そこにおける人間は、宇宙の巨大さに驚嘆するとともに、自己の微小さ、無を自覚して絶望する。パスカル、ニーチェが直面した無である。かつてニーチェは、この無の超克を目指し、超人、力への意志を説いたものの発狂して力尽き

中 富 清 和

た。ニーチェを継承したハイデガー、サルトルも現象学という当時最も斬新な方法で無に挑戦した。その結論は、両者とも人間存在は「悲劇」「受難」であり、人類の未来を志向する哲学としての使命は果していない。二十世紀最高の哲学者といわれたハイデガーに至っては、その名声にもかかわらず哲学を放棄し、詩人になってしまった。彼はヨーロッパ哲学全体に通暁する集約者、観知者である。その彼の哲学が行き詰まり、挫折したということは、ヨーロッパ哲学の挫折である。実際、彼以後、巨人と呼ばれる哲学者は輩出しておらず、弟子たちが過去の哲学史をひっくり返すか、社会哲学を語る程度である。

こうしたヨーロッパ哲学の危機の原因は何か？ それは明快である。プラトン以来、ヨーロッパの哲学は「存在 (Sein, être)」を対象としてきたが、実は、この存在とは、無限大の無の哲学か

ら見れば、微々たるものでしかなかった。人間の身体、地球、月、太陽などの天体、物体の総体は、宇宙全体から見ると、地球の大きさの容器（空虚、無）の中のアリ三匹でしかない（『宇宙の不思議』佐治晴夫著、PHP文庫、八三頁）。プラトン以来のヨーロッパ哲学は、アリ三匹の存在、イデアを考えてきたのにすぎない。それに対し、本稿はアリ三匹を含む地球そのもの、いわば無限大の宇宙をも含む無を第一に問う。無は古今東西、古くから語られてきたことであり、中国の老子、莊子は無からの万物創世をインドの『リグ・ヴェーダ』では宇宙開闢の讃歌に、イスラエルでは『創世記』に無からの宇宙創世が記されている。この無とは超越者が人類に対して啓示した最高の教智であって、無↓無限↓永遠↓超越者（神）→愛へと連続する。これを無と愛の原理と名づける。以下、無と愛の原理の論証である。

一 実在としての無

本稿では、老子の「無」「道」を形而上学的実在とみなす。というのは次の理由からである。第一に、道は天地を開いた万物の母であり（『体道第一』）、すべてのものを生み出す根源、万物に行きわたっているものである。これはギリシア哲学で言うアルケー（arche）であり、普遍性を有する概念である。第二に、道は物質的規定を受けない超越的存在である。「賛玄第十四」によれば、道とは「夷」（影も形もないもの）、「希」（音声のないもの）、

「微」（隠れたるもの）であり、感覚によって把握できない存在、物質性を超えた超感性的な存在である。以上から筆者は老子の無道を形而上学的実在とするが、さらに考究すると、次のようにまとめられる。

(一) 生成の根源としての道・実在

「体道第一」によれば従来までの道は真の道ではなく、単なる人為的な言葉、中身の無い空虚な言葉でしかなかった。従来までの道とは孔子の説く道であるが、その意味するところは人の守るべき規範、人倫である。論語の「里仁篇」によると孔子の道は「忠恕」（真心と思いやり）であるが、老子はこうした孔子の道を否定した。そもそも天地が開ける以前には名がなかったのであり、万物の母である天地が開けて初めて天地という名が起こったのである。だから天地を開いた道を体得することによって万物の錯雑とした相を見ることができ、いわば万物の根源となっている原理を見いだしうる。「成象第六」によると道は天地万物を産み出す大いなる力、玄牝即ち奥深く微妙な女性性である。この女性の門は、天地の根であり、疲れることなく産み、万物を育む。道は天地万物生成の根源、支配者としての実在である。それは遍く行きわたっている。その果ては天地、宇宙の遥かかなた、即ち無限である。

(二) 無限者としての道・実在

「象元第二十五」によると道は、形、姿、物質性を超えたもので

あり、天地万物に先立つ渾沌とした何物かである。それは声もなく姿もない存在であるから表現し尽くせないものである。それで無とも呼ばれる。この無は他のものに依存せずそれ自体で存在し（自存性）、遙かなたの万物にまで至る大なるもので、「大」とも言う。この大、無は万物を産み続け、宇宙を展開、前進して行く。その大きさ、広がりには限りが無く、無限である。それは無限であるから、あらゆるものを包み込む。それで包括者（Umgreifende）ともいえるが、その証として自然法則を表わす。我々は、道、無を知覚することはできないが、自然法則を通して無、無限者を体験できる。それは自然に則る在り方であり、理想的な生き方「無為自然」である。無為自然とは何もしないことではなく、無に従って生きることである。無とは何も無いのが、よいというのではなく、有無を超えた絶対無である。

（三）絶対無としての道・実在

この絶対無とは、「創世記」における天地創造以前における万物の非存在（絶対的の非存在）ではない。表現形式的には言葉で表現でき無いということで否定辞ではあるが、しかし、それは単なる表現形式の否定辞に留まるものではない。世界を産み出し支配する実在者、無限者である。無限者とは天地万物あらゆる存在、即ち有を包含する。そこでは無が有を包み、無と有の相対的区別がなくなり区別を超えた無（相対を超えるとは絶対であるから）絶対無である（「養身第二」）。では相対的区別を超えた絶対無を

我々はいかなる方法で知りうるのか。それは直観である。

（四）無・実在の体験的直観

「虚心第二十一」によると道の有様は恍惚としていて定めがたい。だが、じっと心を虚静にしていると奥深く暗い微かな中に純一無雑なもの、道がある。この道は虚心によって知りうる。虚心とは様々な知識、概念を排除して対象を知る方法である。これは哲学では概念分析、言語表現でない以上、対象への直接的参入、合一、体験的直観である。このような老子の無の思想は、莊子によって継承され、深化、発展していった。神観において両者は若干の相違はあるものの実在としての無は同一である。この実在論はヨーロッパ哲学にも存在する。ベルクソンの実在と後期ハイデガーの存在概念である。

ベルクソンの実在（*réalité*）は意識としての純粹持続（*durée pure*）であり、それは我々の意識の連続的な流れ、意識の融合、相互浸透である。この意識は『物質と記憶』において記憶となる過去に流れ去った意識は消失するのではなく、現在の意識と一体となって保持される。さらに彼は身体に刻印される記憶（学課の記憶 *souvenir de la leçon*）と身体に刻印されない記憶（純粹記憶 *souvenir pur*）を仮定、後者を大脳に保存されない独立的記憶とし（カナダの世界的脳外科医、ペンフィールドによって証明された）、実在とした。この実在は個人を超えて生命全体を貫く生命的実在、即ちエラン・ヴィタル（*élan vital*）となる。その考

えは『創造的進化』に記されているが、これによって生命の宇宙への前進という壮大な形而上学を展開する。ベルクソンの実在は生命全体の源流であり、物質の原因でもある。実在は爆発的に拡張し（これは宇宙物理学における宇宙創世のビック・バン理論に先立つ）、生命進化を可能にした。爆発の弛緩下降が物質である（量子論のヒッグス粒子は、この考えを裏付けている）。宇宙、万物すべては実在の力を受けている。これを象徴するのが「宇宙は持続する」(E. C. p. 11)である。なお、ベルクソンにおいて持続、実在は動き、運動でもあるから「宇宙は持続する」を「宇宙は運動する」と言い換えることもできる。これはハッブルの宇宙膨張説に先行している。

以上、老荘とベルクソンの実在概念は、言葉では表現し尽くせ無い生命の流れ（実在としての無）、生命原理、感性を超える形而上学の原理として両者は一致する。しかも、両者とも生命の核心と一体となる直観的方法 (method intuitive) の採用において、その一致はさらに強固となる。この一致によって東西の思想的共通基盤が確立し、自由自在の往来が可能となる。この橋梁がなければ、東洋思想とヨーロッパ哲学の単なる羅列になってしまうであろう。また、直観的方法をとらない限り、文献学に依存し一人では二百、三百年かかる研究になってしまう。しかも、結論は「言語の相違は決定的で、共通する哲学・思想基盤は見当らない」のありきたりのものである。しかし、実在としての無が中富

清和著『無と愛の哲学』（北樹出版）の成立を可能にした。この無を後期ハイデガーも直観したが、概念把握、論理学的思考把握に失敗して、詩人に転身した。ヨーロッパ哲学の挫折である。

二 空の根底としての無

実在としての無は、定義しきれない生命の流れであるとともに、否定辞の無として論理学さらには前論理学的に機能している。それは空の根底としての無である。空も無に依存し、無の原理は仏教にも及んでいる。その論拠は二つある。第一は仏陀の虚無体験である。若き日の仏陀は王子として何一つ不自由なく豊かに暮らしていたが、病人、老人、死者を見て人生の虚無、無を体験し、出家するに至った（四門出遊）。仏陀は虚無、無を自覚したからこそ、空、悟りに到達した。その人生的意味において無は空に先行している。

無が空の根底になっている第二の論拠は、空の因となる縁起において、無が前提となっているからである。縁起とは、事物、存在の連関、相互依存関係の認識であるが、存在の相互依存関係を知るには、存在の自存性の否定、拒否、無が必要である。存在物が互いに相互依存関係にあるということは、存在物がそれ自体において、普遍的に存在するのでは無いという否定、無が機能しているのである。事物、存在は独立、普遍に存在するのではなく、他の事物、存在と互いに依存し合いながら、連関し合いながら存

在するという縁起の考え方から、すべての事物、存在に実体は無いという諸法無我、無自性が導出され、無我、無自性から空が説かれる。空の起因である縁起が無を前提とする以上、空も無を前提とするのである。そこから空の根底としての無が提起される。無は空の根底に機能している。それは様々な欲望の否定、無化作用の無として働いている（参照、『感興のことは（ウダーナヴァルガ）』（中村元訳、岩波文庫）第二十九章、ひと組ずつ）。物欲、食欲、迷い、悩み、情欲、怒、迷妄、妄執が無となる境地が、賢者の境地であり空である。この空において、あらゆる苦しみから解脱しうる。即ち空は無相、解脱、ニルヴァーナ（涅槃、悟りである。そして、この悟りとは「無、願望、無希望、無所有、生死の無化」、『スッタニパータ』（第五、一〇、学生トードイヤーの質問）であり、無が機能している。『ウダーナ』（小部ニカーヤ）によると仏陀は、悟りを開いて七日間、足を組んだまま解脱、悟りの境地を楽しんだ。その後、十二縁起を観察したことになる。したがって通説では、悟りとは縁起、縁起の自覚から諸行無常、諸法無我の説が展開されていくが、『ウダーナ』（小部ニカーヤ）を根拠にすると、悟り、空が先行している。悟りの七日間とは、単なる日常の七日間ではなく、永遠につながる七日間であったと解すべきである。その間、仏陀の思念の中にあつたのは、強烈な否定、伝統的なバラモン教説、学問、悪しき慣習の否定、いわば無化、即ち無の原理である。仏陀自身、悟り、空の境地において無の原理

を言及しているわけではないが、その体験において無の自覚、機能を理解していたので「空」「悟り」と表現したのである。『感興のことは（ウダーナヴァルガ）』第二十六章に、その境地が記されている。有ったものが無い、虚空も無く、識別作用も無く、太陽、月、水、地、火風も無く、さらには光、暗黒も無い。来ることも無く、行くことも無く、生ずることも無く、没することも無い。住して留まることも無く、依存することも無い。これは、運動の無い状態であり、静止も無い状態である。光も無く、暗黒も無い、運動、静止、物体の無い、即ち、あらゆる万物が無い状態、無としてしか表現でき無い境地、無の原理が機能していたのである。仏陀の悟りの七日間を、どう把握するかで、仏教理解が違ってくる。この論考は、七日間にわたり、仏陀の思念において、無の原理が機能し、無が仏陀の悟り、空の根底に作動していたことを論証する。無の原理からすれば、仏教の伝統的な概念、縁起、諸行無常、諸法無我也説明がしやすい。縁起とは存在の相互依存関係を言うがその根底には、常にそれ自体では存在でき無いという無の働きを認めることができる。これを自存性の欠如としての無と名づけるが、そこから、あらゆる存在物はそれ自身で独立的に存在できない、永遠不変の実体は無い、即ち諸法無我である。また、存在物是不変でありえ無い、すべては変化する、即ち諸行無常である。伝統的な仏典によると、仏陀は縁起を悟り、それから諸行無常、諸法無我を説いたとされるが、仏陀の悟りの七日間の間に、

無の原理の機能により、縁起と諸行無常と諸法無我は同時に直観されたのである。この三つの重要な教説は、常に三者が相手を前提としている相即不離の關係にある。

無の原理は、聖書においても機能している。「創世記」第一章には、「無からの天地創造」が記されているが、モーセも無の原理を直観した。天地創造以前は、物質的な意味では全くの無、絶対的無である。しかし、そこでは神の霊が動いていた。それは「無のゆらぎ」「微小な振動の波」である。「無のゆらぎ」に神の光が煌めいて、ビック・バンが発生した。無からの宇宙創世を説く現代の宇宙物理学は、無の原理と聖書の無からの天地創造を科学的に支持する。無からの天地創造説は無の原理と適合し、存在の究極に「無」を垣間見た物理学に、無からの宇宙創世論の道を開いた。「無」に突き当たった科学は、試行錯誤の中で無の原理に従ったのである。聖書において最初に無を記述したのはモーセであるが、同様に無を直観しつつさらに強烈に無を体験したのがソロモンである。彼は「伝道者の書」において「空の空、すべては空」を語ったが、この空の言語（ヘベル）の意味は、「息吹」、はかなく消失する息である。息吹は空気と同様、つかみどころのない瞬時にして消失するはかなさ、実体の無さの象徴である。それは無の原理でいう「自存性の欠如の無」であり、これによって「空」概念は仏教を超えて、聖書にも妥当する普遍概念となる。仏教とキリスト教はそれぞれ独自の宗教で伝統的な宗教理解では

つながることはないが、「自存性の欠如の無」が仏教の空と聖書の空を連結する。この無は極めて広範囲かつ有効な概念で、量子力学の不確定性原理や西田哲学の難解とされる絶対矛盾的自己同一を明快に説明しうる。

三 ヨーロッパにおける無

仏陀、ソロモンの直面した虚無は、パスカル、ニーチェも体験した。無限大に広がる宇宙の中で一人の人間は、いかに微々たるものか。パスカルは暗黒の無に恐れ戦くとともに、絶望する。しかし、その無の直観から無限大が思考され、無→無限→永遠→超越者（神）→神の愛に至る。パスカルも無と愛の原理の賛同者である。人間を「無と無限」の中間者として規定するとともに、万物の無からの創造と無限への前進を解く。パスカル自身「無から生じる第一原理」を記し、無を第一の原理としている。これは無からのビック・バン理論をはるかに先行するものであり、我々はパスカルがキリスト教弁証論を説いたとする通説以上に、無の原理の賛同者、支持者としての新説を提起する。

ニヒリズムの克服を説いたニーチェも「無」を直観した。あるいは無を直観したからこそ、無、ニヒリズムの克服を説いたのである。ニーチェのニヒリズムとは、あらゆる価値の喪失、宗教、哲学、道徳など、人間存在における最高価値、規範の無価値化である。人生には意味も無く、目的も無く、目標も無い、すべては

無に帰するとする考え方である。いうまでもなく、そこには無の原理における無が機能している。ニーチェが無を直観したとする代表的な箇所は、「ヨーロッパのニヒリズム」と題されている、スイスの保養地レンツァーハイデの手記である（一八八七年六月十日）。

……生存はそのあるがままの形で見るなら、意味も目的もない、しかし必ず繰り返される、無という終極もない。「永劫回帰」だ。これこそニヒリズムの最も極端な形態である。

無（無意味）が永遠だというのだ！……

（『ニーチェ全集』第九巻、遺された断想、二七八頁、白水社）

ニーチェの無とは価値破壊、価値喪失、価値ニヒリズムとしての無である。では、ここで言う価値とは何か？ それはユダヤ教とともに約三〇〇〇年にわたってヨーロッパ社会の最高価値、最高規範として君臨してきたキリスト教である。ニーチェは、このキリスト教を徹底的に否定し、破壊をもくろんだのである。その否定の境地がニヒリズム、ニーチェの無の直観である。その限りの無い否定の境地において、無限の反復としての永遠回帰、そして超人、神の直観へと到達する。ニーチェの哲学も、無→無限→永遠→超越者（超人、神）→愛（運命愛）へと連続する無と愛の原理から説明される。無を直観したニーチェは仏教について断片的かつ聞きかじりの知識しかなかったにもかかわらず、本質的に深い仏教理解を示した（『無と愛の哲学』一八一―一八五頁）。つまり

無の原理からすれば、ニーチェの致命的誤解である「無は涅槃なり」のテーゼが真実として認められる。すでに論証したように涅槃とは悟り、空である。空の根底には無が機能していたから、「涅槃とは無」「無とは涅槃」とするニーチェのテーゼは認められるのである。仏教の教学からすれば、ニーチェの仏教理解には様々な誤解が認められるが、しかし、無の原理からすればニーチェは仏教の本質を鋭く、かつ見事に洞察している。それはニーチェが無の原理を直観したからである。無の直観から、無限の反復としての永遠回帰を直観したニーチェは、その克服として超人（Übermensch）の理想を説き、ツァラトゥストラを登場させる。

しかし、この超人とは本稿の立場からすれば、イエス＝キリストの投影に他ならない。牧師の家庭に育ち、しかも、教会付属のギムナジウムに学んだことは、キリスト教精神の影響を認めざるをえない。何よりもニーチェが十四歳（一八五八年八月十八日）九月一日までの回顧）の時に記した信仰告白、神のために命さえも捧げる覚悟の告白を軽視してはならない。同じ年頃のジャンヌ・ダルクも神を直観し、やがてフランス軍を救ったではないか。ナイチンゲールは十七歳の時、神の直観を体験し、やがて看護婦としてクリミア戦争で、多くの傷病兵を救ったではないか。十代の神直観は、歴史、社会を動かす原動力ともなりうる。少年時代のニーチェは、イエス＝キリストを神として信仰した。その時、ニーチェの心奥深くに、キリストの楔が打たれたのである。この楔は

ニーチェが意識しようとしまいと、生涯にわたって存在し続けた。ある時は罪の解放として軽快感、安息、平安をもたらし、ある時は罪の結果として重い憂うつな気持ちをもたらした。ツァラトゥストラが平安に満たされる場面があるが、それは神からの平安である。しかし、生涯、頭痛、眼痛で喘いでいたニーチェは、長く平安に浸ることはできなかった。医者から匙を投げられ、治癒の見込みが全くつかない絶望的な状態。苦難が十年、二十年続けば神への不信が生じる。ニーチェは神に絶望せざるをえなかった。それで、キリスト教を否定し、超人という新しい理想的人間像を提起したのである。しかし、この超人とはニーチェの心の中に打たれたキリストの楔の煌きである。超人の思想はキリストとの対比対決において一層深め、広められたのである。

この超人の特徴をまとめると次のようになる。

- ① 超人とは大地・実存である
 - ② 超人は新しい価値の創造者なり
 - ③ 超人は既成の伝統的価値の破壊者なり
 - ④ 超人は人間の現実的理想である
 - ⑤ 超人は平安を享受する
 - ⑥ 超人は永遠を愛する
 - ⑦ 超人とは予言者である
- 以上、七つの本質的特徴がキリストにも妥当すれば超人がイエスの投影であることが論証される。

① キリストは大地・実存である

イエスは大工の息子として誕生した。重い木材を汗水たらして運び、組み立て大地に家を建てた。三十三歳にして神の国の福音を説き、ユダヤ教の律法学者によって十字架にかけられたイエスは生身の人間であり、十字架で悩み、呻吟する実存である。

②と③ キリストは創造者、破壊者である

イエスは旧約のユダヤ教律法学者の形式主義的教説を破壊し、新しい神との契約の教説、純粹な生きた信仰への道を創造した。

④と⑤ キリストは理想であり平安である

イエスは全人類の罪を背負い罪から解放した。神の愛を実現し、人間の理想を示した。イエスは罪からの解放者、ゆえにキリストにあつて平安である。

⑥ キリストは永遠

ツァラトゥストラは永遠の言葉を愛し、何度も叫び求めた。それに呼応するようにイエスも弟子たちに永遠を説いている。イエスの復活によって死が克服され、永遠の命が証明された。時代的にイエスの永遠はニーチェの永遠に先行している。

⑦ キリストは予（預）言者である

ツァラトゥストラは「超人の千年王国」を予言したが、その一九〇〇年前に終末、「キリストの千年王国」は預言されている。

イエスはツァラトゥストラに先立つ預言者である。

以上から、超人をイエスの投影とし、晩年にキリストへ接近するニーチェは、キリスト者になる。百万回神を否定しても、死の直前一回でも肯定すれば誰でもキリスト者になれる。かつてはパウロも反キリスト者であったが、失明体験（無の直観）から神を直観し、キリスト者となった。ニーチェも無→無限→永遠→超越者（超人からイエス）→愛へと至る。無と愛の原理がニーチェ解釈の逆転を可能にした。

四 愛

孔子も無を直観した。「……予れ言うこと無からんと欲す。

……天何をか言うや。四時行なわれ、百物生ず。天何をか言うや。」（『論語』陽貨十九）無の深淵を体験した孔子は限り尽きることのない無限の学問への情熱を燃やした。その途上において人間社会における仁、礼の重要さを発見し、この徳の自覚と深化、実践を問いた。力の限り生き抜いた孔子は晩年に至り「何も言わな無」即ち天を直観する。孔子は民間の迷信的鬼神は否定したが、天は認める。古代中国では天とは天地万物の動き、生長を主宰する神、超越神であった。孔子は無→無限→超越者（天）を直観し、最後に仁を超える至高の愛「聖」（民衆を救済する愛）を直観、体験する。孔子の思想も無と愛の原理から説明される。

この原理は当然、仏陀の慈悲にも適用される。仏陀は無の直観

から悟りに到達した。悟りは全宇宙の真理、無限・永遠の真理と一体になることであるから、無→無限→永遠→超越者（ダルマ）→愛（慈悲）へと至る。孔子も仏陀もイエスの誕生数百年前に、キリストの十字架の愛、全人類の愛を予兆、直観したのである。古今東西の偉大な哲学・思想・宗教は無と愛の原理によって総合される。

使用文献 その他、詳細については中富清和著『無と愛の哲学』（北樹出版）を参照のこと。

E. C. (L'évolution créatrice P. U. F)

（なかとみ・きよかず、哲学、千葉県立富里高等学校教諭）